様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　8 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０２１８
研究課題名（和文）　上代文学の歌・説話と声の歌・説話との比較研究
研究課題名（英文）　A comparative study of Japanese ancient literature and oral literature

研究代表者
真下　厚（MASHIMO　ATSUSHI）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：50209425

研究成果の概要（和文）：
日本上代文学を日本及び東アジア各地の声の文芸と比較することによって、文学発生の様相、東アジアの基層文化（神話や歌掛けなど）と上代文学との関わり、文字表現の背後に広がる声の生態、声の表現の文字化などのような、上代文学における声と文字との関わりの諸相について考究した。
研究成果の概要（英文）：
By comparing Japanese ancient literature with oral literature in Japan and in various areas of East Asia this research aims to explore the diverse aspects of connection between voice and written signs in ancient Japanese literature. Particularly, it deals with the problem of origin of literature, the connection between cultural fundamentals of East Asia (myths, utakake - rites of songs exchange, etc.) and ancient literature, with the system of vocal acts that forms the background for literary expressions, or literation of vocal expressions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学

１．研究開始当初の背景

上代文学が声（口頭）の要素を色濃く有することは古くから論じられてきたが、その研究の殆どが生きた声の文芸を比較資料として取り上げることなく、上代の文献資料のみから帰納的に推論したり、声の文芸の資料が援用されることになったとしても文献化された資料を通して研究するにとどまってきた。しかし、声の文芸は声の発し手と聴き手との関係において成立し、生成と伝承のうちに流動するようなダイナミックなものである。その様相は生きた姿においてしか捉えることができない。上代文学における声の要素について考究するためには、こうした声の文

芸の生態を明らかにし、そこから上代文学を照射することが必要である。

本研究代表者はかつて「文字の世界の向こうへ」（『古代文学』第４０号「小特集・古代文学研究の現状と展望」、古代文学会、２００１年、６８頁から６９頁まで）において上代文献の文字世界の向こうに広がる声の世界を解明するために今日なお世界各地に生きている声の文芸の生態についての調査・研究を重ね、そこから導かれる結果を材料として比較研究する方法を提言した。

本研究代表者は、これまで上代の歌謡・和歌や神話・伝説における声の要素と文字表現との関わりについて、「万葉歌と奄美・沖縄の声の歌との比較研究」（日本学術振興会科学研究費・基盤研究Ｃ、２００３年度から２００５年度まで）、「日本古代神話・伝説と琉球神話・伝説の比較研究」（日本学術振興会科学研究費・基盤研究Ｃ、２００６年度から２００８年度まで）、「万葉歌と声の歌との比較研究」（財団法人奈良県万葉文化振興財団委託共同研究、２００７年度から２００８年度まで）などにおいて研究を進めてきた。

これらの研究成果にもとづいて、上代文学の歌・説話と日本及び東アジアの声の歌・説話との比較研究をさらに進め、上代文学における声と文字との関わりの諸相について考究する、文献学的研究と声の文芸についての生態的研究とを総合した比較研究を展開させようと構想したものである。

２．研究の目的

本研究は、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』など上代文献に記載されている歌・説話について、主として奄美・沖縄地方の生きた声の歌・説話と、さらには広く東アジア各地の声の文芸と比較研究することによって、それらの文字表現における声と文字との関わりの諸相を考究し、上代文学における声と文字の表現についての研究を体系化しようとしたものである。

もっとも、上代文献所載の歌・説話と今日における声の歌・説話とでは時代、地域、社会などが異なるものであり、それらを比較することは無意味なことのように思われるかもしれない。しかしながら、かつてＡ・Ｂ・ロード氏は古代ギリシアの叙事詩を研究する方法として、声によって生成する旧ユーゴスラビアの英雄叙事詩を分析してそれが決まり文句と口頭的構成法とによって生み出されていることを理論化し、そこからギリシア叙事詩の研究に赴いて、それが声の文芸として生み出されたものであることを論じた（“The Singer of Tales”Harvard University Press、１９６０年）。時代や地域、社会などが異なっていても、声の文芸としての共通性・一般性を見出し得るのである。

本研究においてもこうした方法に倣って、日本及び東アジア各地の生きた声の歌・説話の諸現象を十分に観察してそれらを理論化し、それを手がかりとして上代の歌・説話の諸現象について比較研究を進めてその諸相を明らかにし、上代文学における声と文字との関わりの位相を定位しようとしたものである。

３．研究の方法

本研究を遂行するためには、上代文学についての文献学的な研究を深める一方で、生きた声の歌・説話についての丹念なフィールドワークにもとづいた研究を行う必要がある。このうち、声の歌・説話についてのフィールドワークは、日本の奄美・沖縄地方及び中国湖南省湘西ミャオ族地域などにおける調査・研究を深める一方、東アジア各地の地域・民族の声の歌・説話についての広い知見を求めてゆく。そして、こうしたことを踏まえて、これらの研究を総合して比較研究を行

う。

その比較研究の分野として、次の２つの項目を軸とする。

Ⅰ．上代歌謡・万葉歌と声の歌との比較

Ⅱ．上代説話と声の説話との比較

本研究においては声の文芸についての持続的なフィールドワークが必須であり、それによって初めて上代に文字で記載された文学を照射することができる。こうしたことにもとづいて、奄美大島、徳之島の声の歌である奄美島歌や宮古諸島の民間神話など、中国湖南省ミャオ族、雲南省イ族の歌掛けや民間神話についてのフィールドワークを行うものとする。さらに、本研究には、東アジア各地の声の歌・説話について広い知見を得ることが必要である。いくつかの地域・民族では声の歌が豊かに生成・伝承される一方で歌が文字で書かれ使者によって手紙として相手に届けられるというように、声の歌・説話の文字文化との関わりにはさまざまな位相があり、上代文学の歌・説話における声と文字との関わりの位相を考究するためにはこうしたことについての広い知見が必要であり、こうしたことについて先行文献の調査などによって収集するものとする。

このような作業によって知り得た声の歌・説話の表現や生態を理論化し、そこから上代文学の世界を照射してゆくものとする。

４．研究成果

日本の上代文学について日本及び東アジアの声の文芸と比較してみることによって、まずは文字以前の様相を推定することができる。『古事記』『日本書紀』などにはシャーマン的な人物が呪言・呪詞を発することが記されているが、こうしたものがどのように生み出されてくるかは明らかではない。しかし、奄美・沖縄にはシャーマン的民間宗教者たちがいまも盛んに活動しており、彼らは神霊から教授されたものとして呪言・呪詞や説話形態の民間神話を無意識のうちに生み出しているのである（「奄美・沖縄のシャーマニズムと呪言・呪詞の発生」「民間伝承のなかの創世神話　奄美・沖縄の呪詞・説話から」）。このような様相を文献以前の段階として置いてみることによって『古事記』『日本書紀』の記事への道程を推定することができる。また。こうしたところから、歌や呪詞形態・説話形態の神話が発生するのである（『歌の起源を探る　歌垣』）。このような日本における文学発生の様相について推定することができた。

次に、日本の上代文化の東アジア基層文化とのつながりを示すものとして洪水型兄妹始祖神話や歌掛けがある。洪水型兄妹始祖神話は現在では奄美・沖縄地方に偏在して伝承されているが、本土地方にもわずかに伝承されてきており、上代のイザナキ・イザナミ神話の基層をなす伝承からの命脈をたどることができる（「琉球列島における洪水型兄妹始祖神話とその周辺」）。こうした神話の伝承は民間宗教者たちによって受け継がれ、今日にまで伝えられてきたもののようである。また、歌掛けという歌文化は東アジア・東南アジアに色濃く存在するものであり、日本においても長い伝統と広がりとを有している。上代における歌垣や宴における歌掛け、万葉相聞歌などはこうした歌文化のなかに位置づける必要がある（『歌の起源を探る　歌垣』）。そのなかで、万葉相聞歌は歌垣の系譜に連なるのではなく、宴での掛け合いの歌に連なるものとしてみるべきだと考える。歌垣は不特定の人々による歌掛けであるのに対し、宴は特定の人々によって行われるものであって、歌をめぐる文化の集中、集積が行われてゆくものだからである（「万葉歌と奄美の声の歌との比較研究」）。

万葉相聞歌の贈答は上代貴族たちの恋愛習俗にもとづいて行われたのであるが、万葉歌そのものから知られるところは多くない。中国西南部の少数民族の恋愛習俗を比較の資料として横に置いてみると、歌の背景となる恋愛習俗がさまざまに存していたことが想定されることとなる（「中国湖南省鳳凰県ミャオ族の恋愛習俗」、『歌の起源を探る　歌垣』）。　また、そうした習俗のなかには、恋の歌掛けを二人の証文とするためやいい歌を残しておくためなど、さまざまな目的から声の歌を漢字で書き記すことも行われている（「中国湖南省鳳凰県ミャオ族の恋愛習俗」）。こうしたところから、万葉歌がなぜ書かれたかを推定する手がかりが得られることになるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１３　件）
①真下厚「民間説話はどう書かれたか―『神国愚童随筆』の場合―」（『昔話　―研究と資料―』第４０号、査読有、日本昔話学会、２０１２年、１１７頁から１３２頁まで）
②真下厚「奄美・沖縄のシャーマニズムと呪言・呪詞の発生」（『奄美沖縄民間文芸学』第１１号、査読有、奄美沖縄民間文芸学会、２０１２年、４頁から１０頁まで）
③真下厚「沖縄における女性神役就任儀礼」（『タイ国日本研究国際シンポジウム２０１０論文報告書』チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座、査読無、２０１１年、６３頁から８２頁まで）
④真下厚「琉球群島的洪水型兄妹始祖神話及其亜型」（『形態・語境・視野』中国雲南大学出版社、査読無、２０１１年、５９頁から６５頁まで）
⑤真下厚「島びとに聞く」（『星砂の島』第１３号、査読無、全国竹富島文化協会、２０１１年、６３頁から６８頁まで）
⑥真下厚「新神司に聞く」（『星砂の島』第１３号、査読無、全国竹富島文化協会、２０１１年、５８頁から６３頁まで）
⑦真下厚「神司に聞く」（『星砂の島』第１３号、査読無、全国竹富島文化協会、２０１１年、５３頁から５８頁まで）

⑧真下厚「昔話研究と書記・録音の技術」（『昔話　―研究と資料―』第３９号、査読有、日本昔話学会、２０１１年、１頁から３頁まで）
⑨真下厚「中国湖南省鳳凰県ミャオ族の恋愛習俗」（『アジア民族文化研究』第１０号、査読有、アジア民族文化学会、２０１１年、４１頁から５６頁まで）
⑩真下厚「艶笑譚の一話型とその変容―口承説話における「主人公の交替」に及んで―」（『口承文芸研究』第３４号、査読有、日本口承文芸学会、２０１１年、４７頁から５９頁まで）
⑪真下厚「中国湖南省鳳凰県苗族女性シャーマン聞書」（『万葉古代学研究所年報』査読無、第８号、万葉古代学研究所、２０１０年、９９頁から１０２頁まで）
⑫真下厚「万葉歌と奄美の声の歌との比較研究」（『万葉古代学研究所年報』査読無、第８号、万葉古代学研究所、２０１０年、１頁から１６頁まで）
⑬真下厚「書評　遠藤耕太郎著『古代の歌　アジアの歌文化と日本古代文学』」（『日本文学』査読無、第５８巻第１１号、日本文学協会、２００９年、７６頁から７７頁まで）

〔学会発表〕（計８件）
①真下厚「民間伝承のなかの創世神話　奄美・沖縄の呪詞・説話から」伝承文学研究会平成２３年度大会、２０１１年9月３日、キャンパスプラザ京都（京都府）

②真下厚「民間説話はどう書かれたか―『神国愚童随筆』の場合―」日本昔話学会平成２３年度大会、２０１１年７月３日、静岡文化芸術大学（静岡県）
③真下厚「沖縄における女性神役と集落祭祀」タイ国日本研究国際シンポジウム２０１０、２０１０年１０月２６日、タイ国チュラーロンコーン大学（タイ）
④真下厚「琉球列島における洪水型兄妹始祖神話とその周辺」、国際シンポジウム「兄妹婚神話と信仰民俗」、２０１０年８月２３日、中国雲南省開遠市（中国）
⑤真下厚「艶笑譚の一話型とその変容―口承説話における「主人公の転換」―」日本口承文芸学会２０１０年度大会、２０１０年６月６日、立正大学（東京都）
⑥真下厚「宴の贈答歌―対応関係をめぐって―」上代文学会１月例会、２０１０年１月９日、早稲田大学（東京都）
⑦真下厚「アジアの歌と万葉集―万葉歌と声の歌―」第６回万葉古代学研究所公開シンポジウム、２００９年９月２７日、奈良県立万葉文化館（奈良県）
⑧真下厚「アジアのなかの歌垣　奄美・沖縄の歌文化から」伝承文学研究会平成２１年度大会、２００９年９月５日、中京大学（愛知県）

〔図書〕（計２件）
①岡部隆志・手塚恵子・真下厚編『歌の起源を探る　歌垣』（三弥井書店、２０１１年、真下厚担当執筆は１頁から５頁まで、８頁から２４頁まで、７１頁から８５頁まで、３０８頁から３１０頁まで）
②岡部隆志・工藤隆・西條勉・真下厚編『七五調のアジア』（大修館書店、２０１１年、真下厚担当執筆は３８頁から４４頁まで）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
真下　厚（MASHIMO　ATSUSHI）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：50209425